

想い出の沙洋鎮

神奈川県 稲葉 伊代吉

戦後六十年余も過ぎた今日、大東亜戦争の戦記の思いでを断片ながらお話致します。

私は神奈川県鎌倉郡瀬谷村橋戸の稲葉家の兄弟五人の三男として生まれ、昭和十三（一九三八）年三月、小学校高等科二年を卒業しました。当時は大東亜戦争の真つ只中でしたので、全国的に各家庭の次男、三男坊は徴用として全国の軍需工場へ強制的に働きに行かされるのでした。私も三男坊なので学校卒業後、直ちに軍需工場へ連れて行かれました。

毎日起床は午前六時、六時三十分より朝食。朝食のベルが鳴り出すと我先にと食堂へ駆け込み、ほとんど噛まずに飲み込み、それから味噌汁一杯とたくあんを二切れはよく噛んで飲み込むのでした。毎日朝から晩まで旋盤という機械につかまっ

て兵器の部品造りの作業をしていました。

休みは月一回の日曜日だけ、毎日の御飯は普通の家庭では米が四、麦が六の四分六で、少し良い家庭で米六麦四の生活でした。お米の飯だけと言えば盆と正月三日間だけ、その他は家族に不幸があつた時とか、隣近所の葬式の時だけだったので。

月日が経つのは早いもので、昭和十六年五月、私は徴兵検査を迎え、第三乙種合格でしたが、即日第二乙種に編入され、第二乙種でもいつ召集令状がくるか分かりません。心の準備をして、また元の工場で働いていました。そんな時兄に召集令状がきました。そして南方の第一線に従事して行きました。その兄は後で戦死しました。兄は長男で私より三つ上で、大陸戦線で活躍して除隊していたところでした。

一家の大黒柱が召された後の銃後は女と子供、生活にも影響をきたしましたが、姉や妹達が頑張るから心配しないで御奉公して下さいと言われて、

心強く出征の途に着いたようでした。私とていつの日か知れず、当時はこのような世相で、個人的にはどうする事もできなかったのです。

― 召 集 ―

昭和十七年五月十日、第一乙種に編入され遂にくるものがきました。五月十日、東京目黒の近衛第十七部隊に入隊せよとの召集令状がきたのでした。兄が出征し今度は自分、男手の無くなつた我家を後に近衛第十七部隊に入隊しました。そして大橋隊に編入され、千葉県習志野にて約一カ月間訓練を受けて、中支派遣軍呂第五三九四部隊の沙洋鎮に、自動車第三十四連隊として派遣されることとなりました。

私は当時車の免許を取得してましたので自動車隊に編入されたと思います。

昭和十七年七月、部隊は門司港に集結して五、〇〇〇トン級の輸送船に乗り込み、我々は船底の二段ベットに頭をかかめながら入りました。船内には所々に裸電球がついていて異臭が立ちこめ息

苦しい状態でした。その頃の輸送船は敵潜水艦の攻撃で犠牲となっていましたので、各隊から交替で監視員が甲板に出て敵潜水艦の監視に当たっていました。

玄界灘も夜半に通過し、運良く敵の攻撃も受けず中国大陸が見えて来ました。航行するうちに海は茶褐色の帯状態になり、陸地が見えて来て、これが中国大陸であるかと思っているうちに大河に入りました。揚子江（長江）を溯上しているのです、その川幅の広いことに驚きました。門司港を出航して三日目に上海に到着しました。

上海はさすが世界の港湾都市で、両側の建物は堂々たるものでした。上海から列車で南京に行き、直ちに乗船し、ここから揚子江を溯航するのです。対岸は峻険な山が川に迫っているため、鉄道の敷設もできず、交通の便は船によるしか無いことが分かりました。

漢口で下船し、沙洋鎮には昭和十八年八月一日の午後に着し、歩兵第三十四連隊自動車隊に編

入され、第四中隊第五分隊に編成となりました。

一個分隊には車七台、中隊では三十五台の軍用トラックと乗用車二台が配備されました。

ここで初年兵の一期教育、一般歩兵の基礎教育、自動車の運転及び整備教育を三カ月間受けました。同年兵には免許取得者は余りいませんでした。私は免許を持っておりましたので、一期終了後は教育係を命ぜられました。運転技術及整備についても皆よりは経験者でしたので、特に乗用車のフールドは故障が多くこの整備が大変でした。

当時、中支は夏の最中で、日中は野外にいると頭がくらくらし、草いきれで息苦しかったのですが、夜半から明け方になってぐつと涼しくなり、裸で寝ても明け方は毛布をかぶっていました。

この土地の楽しみと言えば、一月に三〜四回位の慰問映画、近くに数軒の食堂と菓子屋が有り、支那そばや饅頭など売っていました。また連隊の酒保には新宿の中村屋にいたという兵隊さんがいて、おいしい饅頭を作って売っていました。後で

井元中尉殿の主力船団も、夜間到着のため、翌朝歩兵部隊に弾薬を渡しました。

十一月二十五日頃、沙市を出発、洞庭湖の南岸地区を南下し、十一月三十日早朝、常德の第一線部隊に食糧弾薬を補給しました。補給後は直ちに各小隊船団を区分分散して敵機の空襲を避けることに苦心しました。その努力の甲斐あって被害を受けずに終わったのですが、対岸に分散していた小隊車両が敵の地上部隊の猛攻撃を受ける状態となったため、中隊主力は対岸に渡り応戦、午後三時頃より激戦となりました。

当時、第三師団司令部付の軍馬は放馬して、河に馬を一頭ずつ泳がせて、中隊主力の集結地付近に到着してくるといふ悲惨な戦況でした。軍命により「井元船団は十一月三十日夜半までに撤退せよ」とのことで、同夜午後十一時三十分集結、直ちに多数の重傷患者を乗船させて、沙市の基点に向かって行動を開始しました。

しかし夜間にもかかわらず、敵は対岸より中隊

知ったことですが、この饅頭は連隊の名物で、遠く漢口の司令部まで聞こえていたといえます。しかし毎日の食事はナスとカボチャばかり、時々豚肉が入っていました。「ナスかカボチャか、カボチャかナスか、ナスかカボチャの沙洋鎮」とのざれ歌もあつたほどです。

九月に入ると間もなく、連隊主力が浙贛作戦を終えて沙陽鎮に帰還して来ました。

―常德作戦―

昭和十八年十月三十一日、常德作戦参加のため、沙市にて民船六十隻をもって井元中尉率いる井元船団を編成、沙市を基点として陽林子に向かって弾薬の輸送の任を命ぜられました。渡河地点まで運搬し、そこから船に載せて輸送する。途中、強風のため船の帆が旋回して衛生上等兵一人が川に転落して水死する事故が有りました。この兵隊を発見するため古橋少尉分隊長等が残って搜索すれども発見されなかつたのです。

このため遅れて目的地の陽林子に到着しました。

の行動を察知し、猛烈な集中攻撃を浴びせて来る。船の「櫓」を漕ぐ中国人船頭には、中隊の将兵は自らの鉄帽をかぶせ、また綿布団を水に浸した物を体にまとわせて、敵弾を避けるため、一人の犠牲者も出さずに無事離脱することができました。

集中砲火の目標は五重の塔であり、この地点通過の際は猛攻撃を受けました。もちろん、米軍機の昼夜にわたる空襲、地上掃射は猛烈を極めました。帰路敵地上軍の徹底的な水路遮断と、簡易陣地の構築による攻撃に遭遇、加えて往路は充分であつた水路が水量の急激な減水により、寒冷の中を水中に入り、円匙を持って水路を作り、一隻ずつ前進させる難作業を行ったのです。

ようやく前進可能となった時刻から、右地上部隊も攻防戦を開始し、十二月一日から十二月五日未明までの五昼夜にわたる不眠不休の激闘となりました。この激戦は第十一軍司令部の知るところとなり、十二月一日午後一時、軍直協機より通信筒連絡による命を受けました。

それによると「井元船団、陣地の明示をせよ」に直ちにこれに応じました。翌日、十一軍の直協機が十五キロ爆弾を投下し、その上、地上掃射を行い協力してくれました。しかるに敵地上部隊はますます増強され、彼等の猛烈な砲撃戦となりました。ことに十二月五日午後一時頃からは激烈な戦闘となり、「井元船団全滅」の悲報が、後日報道されたことを、復員後知ったのですが、それは誤報でした。

十二月五日夜、小出中佐指揮の独立輜重第四連隊主力の支援するところとなり、同夜半、敵前渡河作戦に成功、敵を徹底的に殲滅撃退しました。これによって、井元船団は沙地基地に向い行動を開始しました。それは、十二月六日未明でした。右の事情により洞庭湖入口付近まで「基」歩兵一個大隊が護衛に就きました。十二月六日午前四時、同大隊本部に連絡に行く。連絡終了、直ちに船団は行動を開始、午前四時四十分頃、敵は堤防上の軽陣地から集中射撃を浴びせてきました。A

しました。

夜間、しかも大きな洞庭湖の渡航作戦は誠に悲壮なものでした。常に船団が航行する場合は、まづ水先案内船が先頭を行く。第二番目に指揮官の井元中尉ほか中隊指揮班の若干が乗船して、次々に指揮船の命によって行動をします。

往路は下流に向かって帆を上げて、およそノット位の速力で進みました。洞庭湖南岸地区を帰路は上流に向かって逆行するため、各船個々の櫓の数と、個々の人力量によって速力が異なるという特異性があります。この夜の指揮連絡法は、紙で作った松明に点火し、先行する船を目標にしつつ方向を見失わないこと、他に櫓を漕ぐ音を頼りにすること等でした。

六日夕刻に先頭の船が洞庭湖の通過を終わったが、残りの数十隻が洞庭湖南岸地区とはいえ、昼間の行動となり、上空から発見されて空襲を受けるのではないかと心配されました。幸いにして何らの被害も受けず、航行作戦は成功して、十二月

軍曹は額に盲貫銃創を受け、名誉の戦死を遂げました。

当時、船の甲板には指揮官の井元中尉、A軍曹、当番兵の鈴木上等兵と中国人の通訳一人でした。A軍曹は支援大隊に連絡して帰船後のことであり、頭痛のため船内にて、ただ一人休養中でした。しかし急激な銃声を聞き、船内にて起き上がりんとして一瞬の受傷であったので、船を直ちに対岸に寄せ、軍医大尉の応急処置を受けました。しかしすでに息絶えていました。

その後、中隊の一部も戦闘を続行しつつ歩兵大隊の援護の下、洞庭湖へと船団を逐次前進を開始しましたが、どうしても夜間中に洞庭湖を通過しないと敵機の空襲を受けるので、夕刻までに洞庭湖入口まで到着するという固い決意の下で、約百隻の船団長井元中尉は地上の敵と銃火を交え、もちろん歩兵部隊の主力もこの戦闘に加わり、一部は船団を護衛しつつ目的地である洞庭湖入口に夕刻到着することができた。夜に入って行動を開始

八日、故A軍曹と護送中の重傷兵二人の死亡者計三人の火葬を行いました。これには終日かかった。以上の重大任務を完遂して沙市に帰着、他部隊と交替して沙洋鎮の駐屯地に帰営しました。

— 湘桂作戦 —

昭和十九年五月、湘桂作戦参加のため武昌に集結し、長沙に向かいました。しかし雨期のため車の運行は不能となり、洞庭湖の湖畔に宿営しました。

私はアメーバー赤痢に感染してしまい、岳州の野戦病院に入院し、翌朝、武漢の大学病院に転送され、一カ月半ほど入院しました。しかし体調を回復して退院、本部に復帰しました。

驚いたことに、私の運転する車両には戦病死として上等兵特進の位牌と遺骨が有りました。私が野戦病院に入院、武昌に後送された後に、伝染病棟が爆撃され、患者全員が死亡すると言うことがあったので、私もその中の一人と認定されたためでした。私は幸運にもその難を逃れたのです。

昭和二十年八月十五日の終戦後、私は中国軍兵士の自動車教育係として配属され、約一カ年間勤務、昭和二十一年四月二十日、復員船にて博多に上陸、焼土と化した故国に帰ることが出来ました。

私は自動車隊であり、歩兵の方のように第一線勤務ではないので、弾の撃ち合いはしませんが、食糧、弾薬等の補給役として、常に敵機の空襲を受ける危険な業務を行って来ました。

その間、幾多の戦友が爆撃で亡くなられた光景が今でも臉に残って、戦争の悲惨さを思います。そして恒久的平和の尊さを祈るものです。

平成十五年十一月九日、急性心筋梗塞にて入院、十五分遅れたら命が無いとのことでした。幸い一カ月余りで退院し、現在は福祉関係のボランティアとして活動中です。

手榴弾と共に生きる

山形県 菅原喜美

私は、大正十(一九二一)年十二月十七日、現住地で生まれました。入隊当時の家族は父・妻・弟三人の六人家族で、父は農業の傍ら日雇い労働者、私は大阪のガス会社でコークス生産課で働いておりました。上の弟は九歳違いの小学生で、妻は三人の弟が小さいので育児と家事専業でした。

山形と言えば「さくらんぼ」が思いだされますが、私が小さい頃は各家の空き地に一本くらい植えられている程度でしたが、山形産の「さくらんぼ」は味の好きが全国に知れ渡り、現在東根地区は日本一の生産地となりました。

「さくらんぼ」以外にフランス生れの「ラ・フランス」、林檎、ぶどう、桃等四季を通じてどこへ行っても旬の果物が満喫出来ます。

また東根地区は明治四十二(一九〇九)年、四